

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY

2025.1
No. 778



※ P6068 参照



※ P6099 参照



※ P6086 参照

目次

[巻頭言]

新しい年を迎えて
総長 湊 長博 6068

[大学の動き]

- 運営方針委員が発令される 6071
- 部局長の交替等 6071
- あべ俊子 文部科学大臣が、iPS 細胞研究所 (CiRA) と高等研究院物質-細胞統合システム拠点 (WPI-iCeMS) を視察 6072
- 第 19 回京都大学ホームカミングデイを開催 6073
- 京都大学 On-site Laboratory「地震・津波未災学国際 Lab」の開所式をメキシコ国立自治大学にて実施 6075
- 公開講座 京大知の森 (令和 6 年度秋季) を開催 6077
- 令和 6 年度定年退職予定教員 6078
- linkhub@ (リンクハブ) の第 1 号が国際科学イノベーション棟に、第 2 号「京都大学文学研究科ぶんこも」が文理学部校舎にオープン 6081
- KuSuKu アカデミックプログラム「秋の京大キャンパス探検ツアー」を実施 6084
- 第 12 回サステイナブルキャンパス推進協議会 2024 年次大会を開催 6085

[部局の動き]

- がん免疫総合研究センターの開所式を開催 6086
- 生命科学研究所創設 25 周年記念シンポジウム・式典・祝賀会を開催 6088

- 令和 6 年度京大関係病院長協議会定例総会を開催 6089
- 2024 年度「宇治キャンパス若手研究者交流会」を開催 6090
- 第 2 回多文化共修セミナー 2024 を開催 6091
- 京都大学研究資源アーカイブが「増田友也建築設計関係資料, 1930-1984 (主年代 1950-1981)」を公開 6092

[寸言]

はからずも波乱万丈 荒木 隆司 6094

[随想]

夢の途中 名誉教授 垣塚 彰 6095

[洛書]

聖アントニウスの誘惑 呉 孟晋 6097

[榮譽]

- 田中 功 工学研究科教授が紫綬褒章を受章 6098
- 西田真也 情報学研究科教授が紫綬褒章を受章 6098

[話題]

- 学部生の研究チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の国際大会「iGEM2024」で金賞を受賞 6099
- 令和 6 年度総長杯ボウリング大会を開催 6100

[訃報]

前川 和也 名誉教授 6101



京都大学

所屬・職名については、行事開催時点のものです。

巻頭言

新しい年を迎えて

総長 湊 長博



新年あけましておめでとうございます。

昨年一年を振り返ってみますと、元日の能登半島地震に始まり、夏以降には相次ぐ台風や豪雨被害が全国各地で頻発するなど、大きな自然災害の多い年でした。わが国に限らず、アメリカやヨーロッパを含む世界中の各地でも、スーパーハリケーン、豪雨に洪水、干ばつ、山火事など大規模な自然災害のニュースが続きました。地球の気候変動が進行していることを改めて思い知らされた年でした。

また世界では、戦争の年でもありました。イスラエルとパレスチナの紛争はすでに2年目に入りましたが、まだ停戦には至っていません。さらに、ウクライナへのロシアの侵攻に至っては、もうすぐ丸3年を迎えようとしています。いまだに収まる気配は全くありません。

そういった中、昨年秋には、本学のウクライナ危機支援基金によって、すでに3回目の受け入れとなるキーウ工科大学およびタラス・シェフチェンコ記念キーウ国立大学からの留学生が、新たに16名入学してきました。継続して在学している2名と合わせて全員で18名となります。私も学生と会って話をしましたが、「朝起きて空襲警報のサイレンの音がなく小鳥の鳴き声が聞こえるということは本当に幸せなこと」とみんな喜んでいて、そして一刻も時間を無駄にできないと、勉学やクラブ活動に励んでいます。今年こそは、ウクライナやパレスチナの戦乱が終結し、少しでも早くかの地に平和と安全が戻る年になることを願わずにはおれません。

学内においては、新型コロナウイルス感染症で大きく落ち込んだ国際交流活動も、ほぼ完全に回復しました。昨年はボルドー大学、ウイーン大学、チューリヒ大学、国立台湾大学とハンブルク大学など、戦略的パートナーシップ校との合同シンポジウムが行われ、また新たに海外で3つのOn-site Laboratoryが開設されました。留学生数も堅調に回復しましたが、昨年は特に、これまで非常に少なかったインドからの留学生のリクルートメントに向けて、両国大学間で活発な動きがありました。これからインドからの留学生が増えることを期待しています。

昨年の年頭挨拶で私は、令和6年は大学の構造改革推進元年であると申し上げましたが、「国際卓越研究大学」への再申請に向けて、全学的に議論と準備を進めてきた年でした。ここで改めて、京都大学がなぜ再度この申請をする必要があるかについて述べたいと思います。

京都大学は、わが国でも長い歴史を有する研究志向型の大学の一つです。本学の基本的な理念は「自由の学風」であり、制約のない自由で多様な学術と研究によって知の源泉を作り出し、それによって人々と社会に貢献していくことにあります。京都大学はこの「自由の学風」という風土の中で、多くの独創的な研究成果を上げ、わが国を代表する研究大学として広く世界に認知されてきましたし、それを私たちは誇りとしてきました。

巻頭言

しかし果たして今私たちは、この基本理念をこの先も維持し続け、世界に誇れるような成果を上げ続けることができる環境にあるでしょうか。私は強い懸念を持っています。先般全ての教員を対象に行ったアンケートでは、研究時間の減少、若手教員の自由な研究や自立化の障壁、研究支援や研究設備共用化の不備など、研究体制や研究環境への強い不満が示されています。

この不満は、とりわけ将来を担う若い教員において顕著であり、研究をミッションとする大学の将来にとって、これは非常に深刻な課題であると思います。

その大きな要因は二つあると思います。

一つは大学に対する政府からの運営費交付金の減少です。国立大学が法人化されて20年、国立大学への運営費交付金は10%以上減少しました。これに物価高騰が加わり、教職員の人件費と教育・研究のための基盤的物件費は縮減を余儀なくされ、大学経営は今やゼロサムどころか、マイナス・サムの時代に入っています。本学では、なんとかこれまで外部資金獲得などによる自己努力で、運営費交付金の部局配当額の削減は回避してきましたが、それでも教員への事務的業務負担の増加によって、研究時間は明らかに減少しています。

もう一つは、わが国の大学の教育研究体制の問題です。戦前から今日まで、国立大学の教育研究体制は、1人の教授をトップに准教授、助教などごく少数の教員からなる小講座制をとってきました。1990年代からの大学院重点化後の大学院研究科においても、実質的に小講座制はそのまま温存され引き継がれてきました。しかし、学術と科学の急速な進化とグローバル化の中で、この閉鎖的な小講座体制は、若手研究者の自由闊達な研究活動や自立化の大きな制約要因になりつつあります。

そのため、私は向こう四半世紀をかけて大学の構造改革を進め、財務経営の自立を確立し、それによって研究の自由を確保していく必要があると考えています。重要なのは、大学の自立と研究の自由であり、自立なしに自由はあり得ません。構造改革の内容については、年末に総長メッセージとして全教職員向けの学内オンライン配信で説明させていただきました。

構造改革を遂行するにあたって、特に重要なのは業務改革です。大学の機能の複雑化に伴って、その運営に必要とされる業務機能も、きわめて多様かつ専門的になってきております。この複雑多様化した業務機能に対応するための業務改革の推進を目的の一つとして、新たな本部体制の導入を開始しました。大学の経営一元化と事業推進のための成長戦略本部、そして包括的な研究支援のための総合研究推進本部をこれまでに設置したところです。

各本部では、教員、事務職員に加え、多様な機能を果たす専門的人材が交じり合い、フレキシブルかつ自由に連携して共同作業を進められる、開放的でフラットなオフィスを目指しています。さらに、業務DXの戦略的導入がその効率化にはエッセンシャルとなります。

そして、このような改革において、最も重要なのは教職員の意識改革です。新しい体制への移行のためのマインドの変換には、それなりに時間がかかるかもしれませんが、それがなくば、どのような改革も単に形だけに終わりかねません。

当然ながら、抜本的改革の推進には、新しい多様な専門人材の獲得と育成、つまり人への十分な投資が必須であり、それを安定的に支えるための自立した財務基盤の確立が必要条件になります。国際卓越研究大学としての認定は、まさにそのための必須の要件です。

これは決して、単に助成金によって不足する運営費を賄うという意味ではなく、この助成シス

巻頭言

テムを活用して、最長25年という期間内に、自らの力によって大学運営資金を賄う自立的な財務経営基盤を作り上げるといことです。そういった点を踏まえて、すでに成長戦略本部では、これまでの寄附基金部門、渉外同窓会部門、産学連携部門、オープンイノベーション部門など関連の組織が一元的に統合され、外部資金獲得に向けて効率的な運営が進められています。

京都大学が目指すところは、自由な教育と研究の場が保証され、創造的な研究により学術の進歩と科学のブレークスルーを生み出し、その成果によって広く人々の福祉に貢献し、社会にトランスフォーメーションをもたらさう研究大学です。

そのためにも本年は国際卓越研究大学の認定を目指し、業務改革や教育研究改革そして経営改革という抜本的改革に着手し、向こう四半世紀をかけて大学の構造改革を進めてまいりたいと思っております。

本年も皆さまのご協力をいただきますようお願い申し上げて、年頭挨拶とさせていただきますと思います。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

(令和7年1月7日(火)、事務職員を対象として開催した『総長年頭挨拶』より)

[目次に戻る ↗](#)

運営方針委員が発令される

1月1日付で運営方針会議の構成員である運営方針委員が任命されました。任期は令和8年12月31日まで。

運営方針会議は、令和6年10月1日に施行された改正国立大学法人法の規定に基づき設置したもので、運営方針委員および総長で組織されます。同会議は、中期目標・中期計画および予算・決算に関する事項（運営方針事項）について決議するとともに、決議した内容に基づいて適切に法人の運営が行われているかどうかについて監督をする機関です。

本学の運営方針委員は、ジェンダーバランス等の多様性と適正規模を考慮しつつ、大学の教育研究活動、大学における国際化および国際研究協力の推進、国内外の大学の経営、国内外の先端的研究および研究成果を活用した新事業の創出の動向、大学に関する法律および会計等に関し、適切な知識、能力、経験を有する者をバランスよく備えた構成とすることを考慮して選出しました。

氏名	主な役職等
金出 武雄	カーネギーメロン大学 創始者記念全学教授 産業技術総合研究所名誉フェロー
Sachiko Kuno (久能 祐子)	株式会社フェニクシー 共同創業者・取締役 S&R エバーメイ財団 (ワシントン DC) 共同創業者・理事長
澤田 純	日本電信電話株式会社取締役会長
中西 友子	東京大学名誉教授・特任教授 星薬科大学名誉教授・前学長
平野 信行	株式会社三菱 UFJ 銀行特別顧問
堀場 厚	株式会社堀場製作所代表取締役会長兼グループ CEO
稲垣 恭子	京都大学理事 (男女共同参画、渉外 (基金・同窓会) 担当)、副学長
岩井 一宏	京都大学理事 (企画・調整、評価、附属病院担当)、プロボスト、副学長
江上 雅彦	京都大学理事 (財務、施設、環境担当)、CFO、副学長
小幡 泰弘	京都大学理事 (総務、労務、人事、危機管理担当)

運営方針会議は、上記運営方針委員および総長で組織されます。

[目次に戻る ↗](#)

部局長の交替等

【新任】

総合研究推進本部長

北川 進 理事が、総合研究推進本部長に指名されました。任期は令和7年1月1日から令和8年9月30日まで。



[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

あべ俊子 文部科学大臣が、iPS細胞研究所 (CiRA) と高等 研究院物質—細胞統合システム拠点 (WPI-iCeMS) を視察

あべ俊子 文部科学大臣が、2024年10月6日にiPS細胞研究所 (CiRA) と高等研究院物質—細胞統合システム拠点 (WPI-iCeMS) を視察されました。

あべ大臣は、まずCiRAを視察され、湊 長博 総長、山中伸弥 CiRA 名誉所長兼京都大学iPS細胞研究財団理事長、江藤浩之 同副所長らとiPS細胞研究の現状や研究現場の課題などについて意見交換を行いました。また、あべ大臣はCiRAの第1研究棟を視察され、高島康弘 同教授からナীব型iPS細胞*について説明を受け、細胞を顕微鏡で観察し、原田直樹 同共通機器管理室長から、iPS細胞等の特性評価・分析に用いる共通機器について説明を受けました。

次に、あべ大臣は、iCeMSを視察され、上杉志成 iCeMS 拠点長から拠点の研究や取組の概要説明を受けたのち、見學美根子 同副拠点長や樋口雅一 同特定拠点准教授らの案内によ



山中名誉所長の説明を受けるあべ大臣



江藤副所長の案内で館内を視察するあべ大臣



高島教授からナীব型iPS細胞の説明を受けるあべ大臣



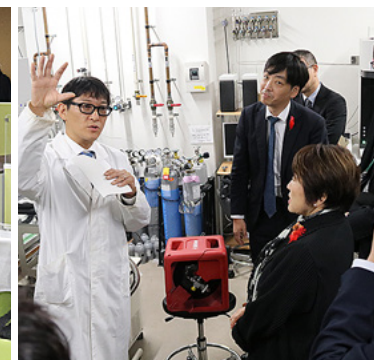
原田室長から共通機器の説明を受けるあべ大臣



拠点の概要について説明する上杉拠点長



見學副拠点長からオープンオフィスエリアの説明を受けるあべ大臣



樋口特定拠点准教授から研究設備の説明を受けるあべ大臣

大学の
動き



今後の科学発展への取り組みについて あべ大臣と文部科学省、iCeMS 関係者述べるあべ大臣

り大型解析機器や最新の研究設備など拠点内を視察され、最新の多孔性材料研究について説明を受けました。続いて、北川 進 理事・副学長らも交えて、研究現場が抱える課題や研究を支える人材の地位向上と全体的な研究環境の強化などについて、意見交換を行いました。

あべ大臣は、日本の研究機関が世界で競争力を保つために、これからも現場からの声を上げてほしいと述べられました。

※ナীব型 iPS 細胞: より初期の発生段階の胚に近い性質を持つ iPS 細胞。通常の iPS 細胞は「ブライム型」と呼ばれ、区別される。

【関連リンク】

あべ俊子文部科学大臣が CiRA を視察されました | 京都大学 iPS 細胞研究所

<https://www.cira.kyoto-u.ac.jp/j/pressrelease/other/241015-130000.html>

あべ俊子文部科学大臣がアイセムスを視察訪問しました | 京都大学アイセムス

<https://www.icems.kyoto-u.ac.jp/news/10172/>

(総務部 (総務課))

[目次に戻る ↗](#)

第 19 回京都大学ホームカミングデイを開催

第 19 回ホームカミングデイを、リアルイベントとオンラインのハイブリッド形式で開催しました。リアルイベントは 2024 年 11 月 2 日 (土) に開催し、大雨にもかかわらず、同窓生 (卒業生、修了生、元教職員)、教職員、学生、一般の方など 4,304 名が参加し、オンラインでも開催当日の動画配信や過去のアーカイブを 2025 年 3 月末まで公開します。

リアルイベントのうち、百周年時計台記念館百周年記念ホールでは、午前に講演会、午後に音楽会を行いました。講演会は湊 長博 総長の挨拶に始まり、歌声合成技術 VOCALOID の生みの親である剣持秀紀氏 (工学研究科・1993 年修了) による講演を行いました。VOCALOID とインターネットの発達により日本のポピュラー音楽シーンが劇的に変化したことについての講演に卒業



湊総長の挨拶



講演を行う剣持氏

大学の 動き

生や在学生だけでなく、中学生や高校生を含む若い世代からも多くの参加がありました。音楽会では、京都大学交響楽団による木管・金管・弦楽器のアンサンブル演奏、京都大学グリークラブの合唱、京大合唱団・同窓会合唱団による合唱を行い、大きな拍手が沸き起こりました。

百周年時計台記念館国際交流ホールでは、「人生100年時代」の資産活用セミナーと、「京都大学アカデミックデイ×ホームカミングデイ2024」を行いました。「人生100年時代」の資産活用セミナーは、三井住友銀行より講師を招いて行われ、ライフプランに合わせた人生設計や安心とゆとりの準備について説明がありました。今年初めての実施となった「京都大学アカデミックデイ×ホームカミングデイ2024」では、本学の研究者と参加者がちゃぶ台を囲んで膝詰めで対話するなど、大人も子供も楽しめる企画を行いました。

クスノキ周辺で開催した「くすのき逸品マルシェ」では、農学研究科附属農場および附属牧場、本学ゆかりのお店や企業による商品販売、キッチンカーなど15店舗が参加し、にぎわいを見せました。



京都大学交響楽団の演奏



京都大学グリークラブの合唱



京大合唱団・同窓会合唱団の演唱



「人生100年時代」の資産活用セミナーの様子



京都大学アカデミックデイ×ホームカミングデイ2024の様子

大学の
動き



くすのき逸品マルシェの様子



スタンプラリーの様子



清風荘の見学

本部構内、吉田南構内に設置された各スポットを巡るスタンプラリーでは、大雨の中、家族連れなどたくさんの参加があり、スタンプを集めた参加者には特製トートバッグを配布しました。また、施設見学では、総合博物館、附属図書館、尊攘堂を無料で一般公開したほか、抽選で同窓生に向けて清風荘の見学を行いました。

その他、百周年時計台記念館京大サロンにて同窓生による書道、写真、イラストなどを展示する「展示サロン」を実施したほか、生協食堂ではホームカミングデー特別メニューや生協パフェが提供されました。

次回のホームカミングデーは、2025年11月1日(土)に開催する予定です。

【関連リンク】

第19回京都大学ホームカミングデー2024 - 京都大学同窓会

<https://hp.alumni.kyoto-u.ac.jp/hcd/hcd2024/>

(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

京都大学 On-site Laboratory「地震・津波未災学国際 Lab」の開所式をメキシコ国立自治大学にて実施

京都大学 On-site Laboratory「地震・津波未災学国際 Lab」の発足を記念し、2024年11月29日(金)に、メキシコ国立自治大学において開所式を行いました。地震・津波未災学国際 Lab は、同年9月に On-site Laboratory に認定されたもので、メキシコ国立自治大学内および本学防災研究所内の双方に設けられた共同研究室を活用して双方の研究者の往来と交流を行います。

大学の
動き

開所式には、メキシコ国立自治大学の関係者に加えて、本清耕造 在メキシコ日本国大使館 駐特命全権大使、小林千晃 国際協力機構 (JICA) メキシコ事務所長、エンリケ・ゲバラ・オルティス メキシコ国立防災センター総局長、ホセ・アルフレド・ガルバン・コロナ メキシコ外務省メキシコ国際協力開発庁メキシコプロジェクトオペレーション総局長らも出席しました。本学からは、河野泰之 副学長と堀 智晴 防災研究所長が出席しました。

続いて行われたシンポジウムでは、メキシコ国立自治大学の研究者に加えて、コロンビア、コスタリカ、エルサルバドルの研究者らも登壇し、本学 On-site Laboratory との連携のあり方と今後の期待について、多くの議論が交わされました。堀所長、伊藤喜宏 防災研究所准教授、中野元太 同研究所助教らも、1990年代から現在に至るまでのメキシコ国立自治大学と防災研究所との地震・津波国際共同研究の経緯と成果について発表し、地震・津波未災学国際 Lab を拠点としてメキシコ国立自治大学とのさらなる国際共同研究を推進するとともに、中南米諸国の研究機関との国際共同研究へ展開していくことへの期待を述べました。

【関連リンク】

On-site Laboratory を新たに 3 件認定しました

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2024-09-26-0>



開所式にてスピーチを行う河野副学長



本清大使を囲んでの懇談の様子



防災研究所の研究活動について説明する堀所長



地震・津波未災学国際 Lab について説明する伊藤准教授



メキシコ国立自治大学との共同研究の成果について説明する中野助教

(防災研究所)

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

公開講座 京大知の森（令和6年度秋季）を開催

成長戦略本部は、公開講座 京大知の森(令和6年度秋季)を、2024年12月8日(日)に、国際科学イノベーション棟シンポジウムホールにて開催しました。

京大知の森は、京都大学の知を広く学内外の人々に向けて発信するため、2023年秋から開催している公開講座です。研究者の手引きのもと、講演や討論を通して多様な研究分野をもつ京都大学の「知の森」に分け入り、研究の面白さや意義を伝えることを目的としています。

第3回となる今回は、メインテーマを「宇宙を拓く」として、野口高明 理学研究科教授による「45億年前の太陽系を垣間見る」、松岡彩子 同教授による「人工衛星で探る宇宙の磁力」と題した2つの講演を実施しました。

野口教授は、初期太陽系の成り立ちや、「はやぶさ」および「はやぶさ2」プロジェクトによる小惑星イトカワ・リュウグウから採取された物質の分析から分かることなどについて紹介し、研究試料(鉱物)の実物展示も人気を集めました。松岡教授は、宇宙空間に満ちている磁場やプラズマの計測や太陽フレアのメカニズム、人工衛星による火星の月や水星をはじめとする探査プロジェクト等について紹介しました。

加えて、両教授による対談および質疑応答セッションでは、参加者からの質問も交え、現在の宇宙研究で分かっていること、今後の探査プロジェクトの展開予定や課題など、講師それぞれの研究と専門的見地から活発な対話が行われました。



講演する野口教授



講演する松岡教授



対談・質疑応答の様子



会場の様子



試料展示の様子

大学の
動き

当日は200名以上の参加があり、参加者からは、「壮大な宇宙について日夜研究されている姿に夢を感じた」、「専門的なテーマを分かりやすく講義いただき、興味深くお聞きすることができた」、「質疑応答が興味深かった。講師のアドリブ的な本音に引き込まれた」などの感想が多数寄せられました。

【関連リンク】

本講演内容は京都大学動画ポータルサイト「KyotoU Channel」にて配信しており、申し込み不要でどなたでもご覧いただけます。

KyotoU Channel

<https://www.channel.pr.kyoto-u.ac.jp/>

(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

令和6年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員61名(教授50名、准教授9名、講師1名、助教1名)が2025年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	宇佐美 文理	文献文化学専攻 東洋文献文化学講座	中国哲学史の研究
	横 地 優 子	文献文化学専攻 東洋文献文化学講座	インド古代・中世の宗教文化(特に女神信仰とシヴァ信仰)、サンスクリット文学
	吉 本 道 雅	歴史文化学専攻 歴史文化学講座	中国古代史・東北アジア史の研究
教育学研究科	高 橋 靖 恵	教育学環専攻 臨床心理学講座	心理療法に活かす心理アセスメント・精神分析的な心理療法と家族関係理解・心理臨床スーパーヴィジョン研究
	楠 見 孝	教育学環専攻 教育認知心理学講座	言語、思考、記憶に関する教育認知心理学研究
法学研究科	鈴 木 基 史	法政理論専攻 公共政策講座	国際制度の創発と変容および国家行動に関する理論的・実証的分析を通じて国際協調の深層を解明する研究
	中 川 博 之	附属法政策共同研究センター 政策実務教育支援セッション	刑事裁判実務に関する研究
理学研究科	松 田 祐 司	物理学・宇宙物理学専攻 物質物理学講座	凝縮系物理学に関する研究
	田 上 高 広	地球惑星科学専攻 地球テクトニクス講座	地球変動に関する放射年代学・同位体地球科学的研究
	寺 嶋 正 秀	化学専攻 物性化学講座	生体分子科学に関する研究
医学研究科	池 田 義	医学専攻 器官外科学講座	先天性心疾患に対する外科治療 先天性心疾患に関する臨床研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
医学研究科	大 森 孝 一	医学専攻 感覚運動系外科学講座	人工気管の開発と実用化 頭頸部がんの多施設共同研究 摂食嚥下診療のセンター化 CAL での外科系人材育成
	市 橋 則 明	人間健康科学系専攻 先端理学療法学講座	運動器の理学療法に関する研究 筋の評価とトレーニングに関する研究
	浅 野 雅 秀	附属動物実験施設	糖転移酵素遺伝子改変マウスを用いた糖鎖機能の研究 エピジェネティクス制御におけるヒストン修飾の研究
薬学研究科	松 崎 勝 巳	薬科学専攻 薬品機能統御学講座	生体膜における動的分子間相互作用に関する生物物理科学的研究
工学研究科	杉 浦 邦 征	都市社会工学専攻 構造物マネジメント工学講座	鋼橋、鋼・コンクリート複合橋、FRP 橋の耐荷・劣化機構、残存性能非破壊評価と合理的設計に関する研究
	西 山 峰 広	建築学専攻 環境材料学講座	コンクリート系建築構造物の耐震、耐火、耐久性および持続可能性に関する研究
	河 原 全 作	原子核工学専攻 核エネルギー工学講座	原子力等におけるエネルギー変換、熱流体工学に関する基礎的研究
	奥 田 浩 司	材料工学専攻 材料設計工学講座	金属・合金の相変態・組織形成過程に関する研究 放射光を利用した材料組織評価手法の研究
	田 中 功	材料工学専攻 材料物性学講座	セラミックスおよび金属を対象とした材料科学の基礎に関する研究
	土 居 伸 二	電気工学専攻 生体医工学講座	非線形・確率的システムと、生体システム、特に計算論的電気生理学に関する研究
	野 田 進	電子工学専攻 量子機能工学講座	光量子電子工学に関する研究、特に、フォトニック結晶、フォトニック・ナノ構造による光制御の研究
	西 田 幸 次	高分子化学専攻 高分子物性講座	水溶性高分子の構造と物性に関する研究 結晶性高分子の高次構造制御に関する研究 研究用装置の開発
	森 泰 生	合成・生物化学専攻 生物化学講座	細胞膜越えのイオン透過を担うチャンネル分子を中心においた生命現象の解明に関する研究
	松 尾 二 郎	附属量子理工学教育研究センター	量子ビーム科学に関する研究
農学研究科	高 柳 敦	森林科学専攻 森林環境科学講座	野生動物の保護管理に関する研究
	杉 山 淳 司	森林科学専攻 生物材料科学講座	セルロースならびに木質の階層的構造と多様性に関する研究
	阪 井 康 能	応用生命科学専攻 応用微生物学講座	微生物の新しい細胞機能の開発およびその分子細胞生物学的基盤の解明に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農学 研究科	三 芳 秀 人	応用生命科学専攻 生物機能化学講座	呼吸鎖電子伝達酵素のキノン・コ ネクションに関する有機化学的研 究
	近 藤 直	地域環境科学専攻 生物生産工学講座	生物センシング工学に関する研究
	伊 藤 順 一	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座	ミクロ経済学と計量経済学をベー スとする食料・農業・環境問題に 関する実証研究
	秋 津 元 輝	生物資源経済学専攻 比較農史農学論講座	持続可能性の実現に向けた農山村 社会開発および食農システム再編 に関する社会学的倫理論的研究
	保 川 清	食品生物科学専攻 食品生命科学講座	食品、医薬・分析への応用を目標 とした酵素に関連する研究
	PILLER, Garry John	国際交流室	Daylength manipulation of phenophases and dormancy initiation in Vaccinium in tropi- cal latitudes
人間・環境学 研 究 科	吉 田 純	人間・環境学専攻 人間・社会・思想講座	再帰的近代化の観点からみた情報 ネットワーク社会論および公共圏 論に関する研究
	小 倉 雅 紀	人間・環境学専攻 東アジア文明講座	東アジア哲学、朝鮮半島の思想文 化、日韓関係に関する研究
エネルギー科学 研 究 科	中 村 祐 司	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー物理学講座	プラズマ物理・フュージョンエネ ルギーに関する理論シミュレー ション研究
	田 中 仁	エネルギー基礎科学専攻 エネルギー物理学講座	プラズマ物理学、主にトーラス プラズマの波動加熱・電流駆動と形 成過程の研究
	楠 田 啓	エネルギー応用科学専攻 資源エネルギー学講座	炭素を中心とした資源・エネルギー 循環に関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	高 橋 基 樹	アフリカ地域研究専攻 アフリカ潜在力講座	アフリカの政治経済と開発および 開発援助に関する研究
情報学 研究科	矢ヶ崎 一 幸	情報学専攻 数理物理学講座	主として微分方程式系を対象とし た力学系理論および応用科学と工 学におけるその応用に関する研究
生命科学 研究科	中世古 幸 信	統合生命科学専攻 遺伝機構学講座	真核生物の細胞周期制御機構の解 析
	上 村 匡	統合生命科学専攻 多細胞体構築学講座	発生生物学、特に上皮平面内極性、 神経細胞の形態形成、成長から老 化まで栄養環境への応答機構に関 する研究
	永 尾 雅 哉	統合生命科学専攻 応用生物機構学講座	低酸素応答に関する研究 天然由来有用生理活性物質に関 する研究
公共政策連携 研 究 部	岡 敏 弘	公共政策第一講座	国際価値論に関する研究、環境政 策に関する研究、温室効果ガス排 出と経済の成長と国際貿易に関 する研究
化学 研究所	二 木 史 朗	生体機能化学研究系	生体機能化学、特に生体膜と相互 作用する機能性ペプチドの分子設 計と作用機序に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
人文科学研究所	岡 田 暁 生	文化研究創成研究部門	19・20世紀の西洋音楽史 特に第一次大戦前後のドイツ・オーストリア音楽についての総合的研究
	高 木 博 志	文化生成研究部門	近代天皇制の文化史的研究
	白 須 裕 之		東方学研究における対象の論理的考察とその形式化についての研究
防災研究所	CRUZ NARANJO, Ana Maria	附属巨大災害研究センター	自然災害起因の産業事故 (Natechs) に関する研究、特にメカニズムの解明、発生率、リスク管理の研究
	澁 谷 拓 郎	附属地震災害研究センター	地震活動と地殻構造に関する研究、特にフィリピン海スラブ周辺の構造と地震活動の関係についての研究
	中 北 英 一	附属気候変動適応研究センター	土木工学と気象学の融合に関する研究 気象レーダと豪雨・洪水予測、気候変動と豪雨に関する研究
基礎物理学研究所	青 木 慎 也	物理学基礎研究部門	素粒子物理学の理論的研究、特に格子 QCD による核力の研究
東南アジア地域研究研究所	貴 志 俊 彦	政治経済共生研究部門	東アジアの地域社会とメディアに関する近現代史研究
	小 泉 順 子	社会共生研究部門	タイ近代史に関する研究
	大 野 美 紀 子	社会共生研究部門	地域研究、ベトナム史
iPS細胞研究所	浅 香 勲	基盤技術研究部門	ヒト iPS 細胞樹立および培養技術の普及、ならびに指定難病の疾患特異的 iPS 細胞ライブラリーの構築
ヒト行動進化研究センター	岡 本 宗 裕		実験動物感染症学、分子寄生虫学、分子系統学に関する研究
国際高等教育院	喜 多 一	情報学教室	システム科学・工学、情報教育、教育の情報化に関する研究
	道 坂 昭 廣	初修外国語教室	中国古典文学の文献学的研究
	家 本 太 郎	附属日本語・日本文化教育センター	タミル語、カンナダ語、マラーラム語の記述言語学的研究

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)

linkhub@ (リンクハブ) の第1号が国際科学イノベーション棟に、第2号「京都大学文学研究科ぶんこも」が文系学部校舎にオープン

本学では「京大らしいキャンパス」の実現に向けて機能的でコンセプトチャルな、新しい交流スペースの展開が進められており、その一環として「linkhub@ (リンクハブ)」の第1号が2024年6月27日(木)に、第2号が同年10月17日(木)にオープンしました。

大学の
動き

linkhub@とは、本学の新しい交流スペースのコンセプトをあらわす場所の名前で、施設系職員の発案でスタートしました。今後、この共通コンセプトのもと、教員やURAと協働し、効果の検証を行いながらキャンパス内へ複数設置することを目指しています。この取り組みでは「linkhub@が生み出すValue」として、「対話による多様なコミュニティの創造」、「連携の土台となる顔の見える関係づくり」、「人や情報との出会いによるセレンディピティの活性化」の3つを掲げています。

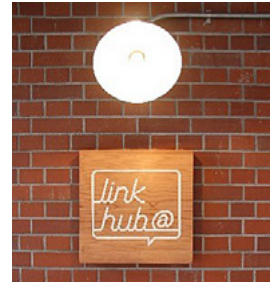
効果的な交流を促す仕掛けとして、福利厚生コンテンツによって人の往来を作りながら、イベントに使える設備、情報発信のための端末を設置することを基本的な要件としています。

第1号は国際科学イノベーション棟東館1階にオープンし、公募によりコンビニエンスストア「ファミリーマート」の出店が実現したほか、イベント用の映像音響装置、情報発信用のデジタルサイネージや本棚を設置しています。コンビニエンスストアは交流スペースと一体となるようにデザインされ、飲食物や文具類、京都大学関連グッズを販売しているほか、複合型コピー機、ATM、無料のウォーターサーバーを設置しています。linkhub@およびコンビニエンスストアは、平日：7時00分～20時00分、土曜・日曜、祝日：10時00分～17時00分の間営業を行っています（大学の長期休暇や学内行事などにより営業日時が変更となる場合があります）。

第2号は文系学部校舎にオープンし、「京都大学文学研究科ぶんこも」と名付けられました。「ぶんこも」とは、文学部の「文」とイノベーション・コモンズの「コモ」からとった、音の響きの良さと、字面のかわいらしさを意識して名付けられた愛称です。文系学部校舎の施設整備費補助金による全面改修工事を機に、居室を集約して1階および地下1階にスペースを確保し、学生同士の対話、外部への情報発信、産官学民との連携を主眼にした新しい交流空間を創設したものです。

1階フロアと、地下1階の多目的エリアお

集まる、ひろがる、
linkhub@
Kyoto University open communication space
linkhub@ のロゴ



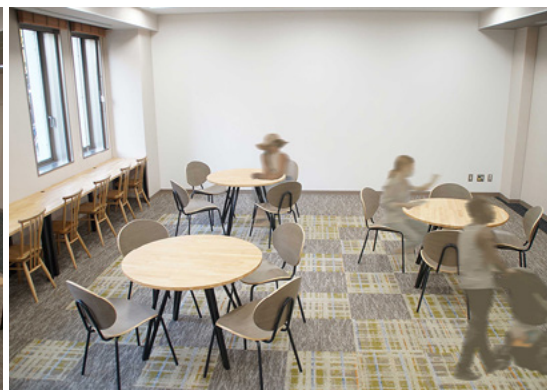
linkhub@ の看板



linkhub@ 第1号 カフェ・イベントゾーン



linkhub@ 第2号 ぶんこもの1階イベントエリア



linkhub@ 第2号 ぶんこもの1階丸机エリア

大学の
動き



linkhub@ 第2号ぶんこものサンクンガーデン



linkhub@ 第2号ぶんこものサンクンガーデンから見た多目的エリア linkhub@ 第2号ぶんこもの地下多目的エリア

よびサンクンガーデン（テラス席）から構成され、1階フロアには天吊りプロジェクタ、Zoom 配信機器、ワイヤレスマイク、ホワイトボード、無料のウォーターサーバー、自販機などが設置されています。また、地下多目的エリアには、超単焦点プロジェクタ、音響設備（有線マイク、スピーカー類、音響スイッチャー、ブルーレイプレイヤー）などを備えています（一部は今後導入予定）。1階フロアおよびサンクンガーデンの利用時間は、平日8時30分～18時30分です。

本学の教育・学習、研究、課外活動、産官学民交流活動および文化的イベントなどに活用する場として、自習や少人数でのミーティングから、大規模なイベント開催まで可能となっています。ぶんこもにおけるイベント等の開催、テーブル単位での使用の場合は事前予約が必要です。当面は文学研究科教職員を通して予約可能で、利用状況を見て全学・学外に展開していく予定です。

今後も日常的な交流の場や機会を充実させることにより生まれる「顔の見える関係」が、多様な「知」と「人材」に新たな結びつきをもたらし、産官学民の連携やイノベーションの創出につながり、これにより「京大らしい活気」がキャンパスにあふれていくことを目指します。

【関連リンク】

効果的な交流を促す空間「linkhub@（リンクハブ）」の第1号が国際科学イノベーション棟にオープンしました

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2024-07-30>

（施設部（施設企画課））

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

KuSuKu アカデミックプログラム「秋の京大キャンパス探検ツアー」を実施

学童保育所 京都大学キッズコミュニティ KuSuKu(クスク)にて、2024年10月27日(日)に、KuSuKuアカデミックプログラム「秋の京大キャンパス探検ツアー」を実施しました。アカデミックプログラムでは、単に子どもを預かるだけでなく、研究者のほか、企業関係者やさまざまな分野の専門家が講師となり、子どもたちの考える力や探究心を伸ばすことを目的とした講演や体験活動を行っています。

今回のプログラムは、施設部に所属する施設系技術職員の企画・協力のもと行われ、9名が参加しました。今回は、同年4月に実施した本部構内の探検ツアーに続く第2弾として、医学部構内を探検しました。はじめに、KuSuKuにて大学施設に関するクイズを行い、その後、医学部構内に向け出発しました。到着後は参加者を2チームに分け、マップに示されたスポットを探すイベントを行いました。マップを参考に、各チームがそれぞれ変わった建物やモニュメントを探し、見つけたものを撮影しました。両チームともそれぞれ協力し、すべてのスポットを見つけることができました。

その後はKuSuKuに戻り、撮影した写真を見せ合い、振り返りを行いました。マップに示されたスポットだけでなく、医学部構内には特徴のある建物やマンホールがあり、地面の下にはガスパ管や水道管があることなど、子どもたちにとって新たな発見もありました。

最後には、京都大学のシンボルである百周年時計台記念館のペーパークラフト作りを行いました。赤や虹色のもの、周りに昆虫がいるものなど、参加者それぞれのペーパークラフトができあがりました。



京都大学の施設に関するクイズの様子



医学部構内探検の様子



ペーパークラフト作りの様子



完成した百周年時計台記念館のペーパークラフト

大学の
動き

本プログラムは、子どもたちが、普段、両親が働く大学のキャンパスについて知ることで、よりよい機会となりました。

【関連リンク】

学童保育所 京都大学キッズコミュニティ (KuSuKu) - 京都大学男女共同参画推進センター

<https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/community/>

(人事部 (職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)

第12回サステイナブルキャンパス推進協議会 2024 年次大会を開催

一般社団法人サステイナブルキャンパス推進協議会 (CAS-Net JAPAN) 主催、京都大学共催で、2024年11月15日(金)～16日(土)に、「第12回CAS-Net JAPAN年次大会」を開催しました。本大会は、経済産業省、京都府、京都市の後援、多数の民間企業等の協賛・協力のもと実施され、「地域と共に創る、環境と経済の好循環:京(きょう)からはじめる行動変容」をテーマに、カーボンニュートラル社会の実現に向けた再生可能エネルギーの利用と電力系統における需要と供給のバランスの確保に必要な調整力について議論する場となりました。

1日目は、はじめに、仁和寺に設置された蓄電池システムを見学し、地域のレジリエンス向上や変動する再生可能エネルギーに対応する調整力としての蓄電池の活用について実践的な知見を共有しました。その後行われた全体シンポジウムでは、経済産業省による基調講演「分散型エネルギーシステム構築に向けた政策動向について」を皮切りに、多様なステークホルダーが最新の技術・政策、実践事例について議論を交わしました。また、協賛企業による講演、企業パネルセッション・情報交換会では、産官学の連携を生かした持続可能なビジネスモデルや地域経済の発展に向けた具体的な方策を共有しました。

2日目は、事例発表分科会を行い、大学および企業がそれぞれの視点から研究成果や実践事例を発表し、分野を超えた知見の共有と活発な議論を展開しました。

本大会を通じて、本学は産官学連携の取り組みを一層推進し、地域と共に環境と経済の好循環を創出することで、カーボンニュートラル社会の実現に向けた取り組みをさらに拡大していきます。



蓄電池システムの見学



集合写真

(施設部 (環境安全保健課))

[目次に戻る ↗](#)



がん免疫総合研究センターの開所式を開催

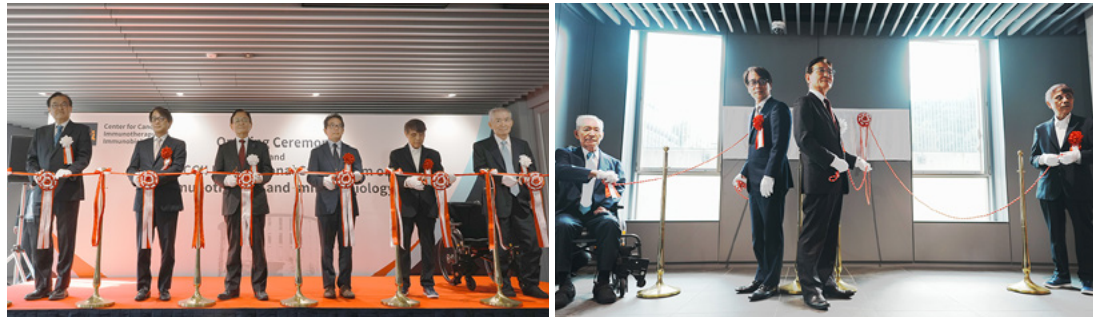
がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟 (以下「BMS 棟」) が竣工したことを記念し、2024年11月12日(火)に開所式を開催しました。

開所式に先立ち、湊 長博 総長、本庶 佑 がん免疫総合研究センター長、伊佐 正 医学研究科長、スティーブ・スギノ ブリストル・マイヤーズ スクイブ株式会社代表取締役社長、建築家の安藤忠雄氏による記者会見を行いました。湊総長は、「この新しいがん免疫療法発祥の地で、基礎から臨床にわたる多くのエキスパートが協働し、がん免疫の新しい地平を開拓して、がんに苦しむ世界中の多くの人々の救命と生活の質の向上に向けて、より一層の貢献をしていただくことを心から期待している」と述べました。本庶センター長は、「がん免疫総合研究センターの開所式を迎えられたことは感無量でございます。心ゆくまで安藤建築と科学の融合の真髄を楽しんでいただければ幸いです」と述べました。



記者会見の様子 (左から、安藤氏、スギノ代表取締役社長、湊総長、本庶センター長、伊佐研究科長)

午後からは、BMS 棟にて、テープカットおよびドナープレート除幕式を行い、新研究棟の完成を祝いました。



テープカットの様子 (左から、伊佐研究科長、スギノ代表取締役社長、湊総長、松浦重和 文部科学省大臣官房審議官 (研究振興局および高等教育政策連携担当)、安藤氏、本庶センター長) ドナープレート除幕式

引き続きBMS 棟内の「ニトリホール」において開所式を挙行了ました。開所式には、オンライン参加も含めて、国内外の研究機関等から約250名の参加がありました。湊総長、伊佐研究科長そして本庶センター長からの開会挨拶の後、来賓からがん免疫研究の発展への期待を込めた祝辞があり、続いて、本庶センター長に寄せられた患者からの手紙が紹介されました。湊総長は、「新設された素晴らしい研究施設で、本庶教授をリーダーとする多くの、特に若手の次世代研究者が、がん免疫研究の新しいステージに向けて道を切り拓いていくことを心から期待し、京都大学としても最大限の支援を尽くす」と述べました。本庶センター長は、新棟開設を支援くださった関係者への感謝を繰り返し述べるとともに、「2050年までに、人類を救うがん治療法の開発を目指して活動していきたい。私たちの今後にご期待ください」と述べました。続いて行われたパネルディスカッションでは、国内外のがん研究者による闊達な意見交換が行われました。

部局の
動き



湊総長



伊佐研究科長



本庶センター長



松浦大臣官房審議官



スギノ代表取締役社長



安藤氏



間野博行 国立がん研究センター研究所長



山中伸弥 iPS 細胞研究所 名誉所長・教授



後藤由季子 東京大学教授



Ashok Venkitaraman シンガポール国立大学教授



Viktoria Li 駐日スウェーデン大使



Mien-Chie Hung 中国医薬大学長



(ビデオメッセージ) 石田靖雅 奈良先端科学技術大学院大学准教授



総合司会をするジャーナリストの国谷裕子氏



パネルディスカッションの様子

部局の
動き



鏡開きの様子（左から伊佐研究科長、檜山義雄 JCR ファーマ株式会社取締役常務執行役員、井村裕夫 神戸医療産業都市推進機構名誉理事長、似鳥昭雄 株式会社ニトリホールディングス代表取締役会長、湊総長）

開所式後に行われたネットワーキングレセプションでは、来賓による祝辞に続いて鏡開きを行いました。会場は大いに盛り上がり、参加者が交流を深められる様子が見られました。レセプションは終始和やかな雰囲気の中、盛況のうちに終了しました。

(大学院医学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

生命科学研究科創設 25 周年記念シンポジウム・式典・祝賀会を開催

生命科学研究科創設 25 周年記念シンポジウム・式典・祝賀会を、2024 年 12 月 2 日（月）に京都大学百周年時計台記念館の百周年記念ホールおよび国際交流ホールで開催しました。

同研究科は、理学、農学、薬学、医学の枠組みを超えて生命現象の根本を理解し、人類の福祉に貢献する知と人材を輩出することを目的とし、我が国初の生命系独立研究科として 1999 年 4 月に設立されました。

記念シンポジウムは、25 年間の歩みを振り返るとともに、未来への展望を共有する場として企画され、学内外の関係者・

学生ら約 330 名が出席しました。第一部では、井垣達吏 生命科学研究科長による開会の言葉に始まり、同研究科にて博士号を取得された修了生の中から、久保郁氏（理化学研究所脳神経科学研究センターチームリーダー）、岡本一男氏（金沢大学がん進展制御研究所教授）、本城咲季子氏（筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構助教）、安部健太郎氏（東北大学大学院生命科学研究科教授）を迎えて講演がありました。第二部では、佐藤文彦 名誉教授（公益財団



開会の挨拶をする井垣研究科長



記念シンポジウムでの集合写真



法人サントリー生命科学財団生物有機科学研究所所長)、柳田充弘 名誉教授 (沖縄科学技術大学院大学 名誉教授)、今吉 格 同研究科教授、片山高嶺 同研究科教授から講演がありました。研究科修了生のご講演からは、修了後の研究の発展ぶりに象徴される成長された姿を通して、大学院生時代に研究者としての礎を築くべく指導された先達の先生方の努力の成果が改めて思われました。名誉教授の先生方からの研究科の歴史のご紹介と励ましのお言葉には、現役教員一同が身の引き締まる思いでした。

記念式典では、井垣研究科長が「25年のあゆみ」と題して25年間のトピックスを振り返り、上村 匡 附属生命情報解析教育センター長が2023年4月に設置された同センターの概要説明を行いました。締めくくりには、生命科学研究所でも教授職を勤めた経歴のある湊 長博 総長から、研究科の発足時の出来事を振り返りつつ祝辞がありました。

夕刻からの祝賀会では、岩井一宏 理事・副学長、石川冬木 学術研究展開センター長より祝辞が贈られました。続いて、熊谷英彦 名誉教授、泉井 桂 名誉教授、竹市雅俊 名誉教授、山本憲二 名誉教授、米原 伸 名誉教授、垣塚 彰 名誉教授より、研究科在籍時のエピソードを交え、楽しく温かいスピーチの数々が寄せられました。学内外の関係者、学生も交えて、創立25周年を祝うとともに、記念シンポジウムの内容等を踏まえた活発な学術交流があり、盛会のうちに幕を閉じました。



祝賀会での集合写真

(大学院生命科学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

令和6年度京大関係病院長協議会定例総会を開催

医学部附属病院では、2024年10月17日(木)に、「令和6年度京大関係病院長協議会定例総会」を芝蘭会館にて開催しました。本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達および病院経営の合理化を企画することを目的として年1回、定例総会を開催しているものであり、学内外からあわせて110名余りが参加しました。

定例総会では、高折晃史 医学部附属病院長の開会挨拶、「京大病院の現状について」の報告のあと、矢部大



挨拶する高折病院長



介 教授(糖尿病・内分泌・栄養内科長)、増田慎三 教授(乳腺外科長)、加藤源太 特定教授(病床運営管理部長)、池口良輔 教授(リハビリテーション科長)、廣田 誠 教授(歯科口腔外科長)、松本理器 教授(脳神経内科長)より新任者挨拶が行われました。

続いて、医師の働き方改革への取り組みや課題について、高折病院長がコーディネーターとなり、パネルディスカッションが実施されました。パネリストとして妹尾 浩 副病院長、足立壯一 滋賀県立総合病院長、寺井章人 倉敷中央病院長より、それぞれ講演が行われたのち、質疑応答では、活発な意見交換が行われました。

その後、武藤 学 教授(腫瘍内科長)より京大病院治験ネットワーク事業ワーキンググループの進捗状況、高折病院長より京大病院125周年記念事業およびドナルド・マクドナルド・ハウス京都について報告があり、充実した定例総会となりました。



講演する妹尾副病院長



講演する足立病院長



講演する寺井病院長



パネルディスカッションの様子

(医学部附属病院)

[目次に戻る ↗](#)

2024年度「宇治キャンパス若手研究者交流会」を開催

宇治キャンパスでは、2024年10月17日(木)、各研究所の枠を超えた宇治キャンパス全体の若手研究者の交流機会として、「宇治キャンパス若手研究者交流会」を化学研究所大セミナー室にて開催しました。

本交流会は、2022年10月の「京都大学宇治キャンパス公開2022」の際に実施した、湊 長博 総長と宇治キャンパスで活動する4研究所の若手研究者との座談会が好評であったことを受け企画されたもので、2回目の開催となった今回は、時任宣博 副学長が出席しました。



川口助教



近藤特定准教授



田中助教



上田特定研究員



全体の様子



質疑応答の様子



時任副学長の講評

交流会は、発表および議論に参加する16名の若手研究者のほか、約20名の研究者と学生が参加しました。山本 衛 生存圏研究所長の司会により、それぞれの研究所を代表して、川口祥正 化学研究所助教、近藤敬子 エネルギー工学研究所特定准教授、田中聡一 生存圏研究所助教、上田 拓 防災研究所特定研究員が研究内容を紹介するプレゼンを行ったのち、多様な研究分野の視点から活発な質疑応答が行われ、交流を深める機会となりました。

質疑応答後は、時任副学長から講評および若手研究者に対して激励の言葉があり、最後に、片平正人 エネルギー工学研究所長の挨拶で交流会は締めくくられました。

終了後、参加者は宇治キャンパス公開懇親会の会場に移動し、和やかな雰囲気の中で、研究所の枠を超えた自由な交流が行われました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

第2回多文化共修セミナー2024を開催

国際高等教育院では、本学学生と世界の学生たちが共に学ぶ機会の充実を図る一環で、特別講義と学生共同セミナーから成る多文化共修セミナーを開催しています。中国日本商会(北京に拠点を持つ日本企業の団体)が主催する「走近日企・感受日本」(「日本企業に触れ、日本を感じよう」)プロジェクトの一環として中国の学生が来学するのに合わせて、2024年11月28日(木)

部局の
動き

に、第2回となる多文化共修セミナーを開催し、中国からは、清華大学、北京師範大学、對外経済貿易大学、中国石油大学、北京語言大学の学生25名が参加しました。

特別講義では、韓立友 国際高等教育院准教授が「日本の大学における教育、研究とイノベーション」と題して中国語で講義を行いました。本学では「自由の学風」の理念の下、多様な学生生活やユニークな研究が生まれる環境を紹介し、そのような素地が革新的な研究成果につながっていることを説明しました。

後半の学生共同セミナーでは、日中の学生が再生可能エネルギーの普及や英語の共通言語化など世界中の学生が直面する社会課題をグループに分かれて議論し、討論を行いました。日本と中国に共通する社会課題であっても、賛否については異なる見解が示され、活発でレベルの高い議論が行われました。



日中學生間の議論の様子



記念品の交換を行う國府理事・副学長



時計台での記念撮影

討論会後の懇親会では、日中の学生が日本語、英語、中国語を交えて交流し、親睦を深める機会となりました。開会の挨拶に登壇した國府寛司 理事・副学長は、自身が中国を訪問した経験に触れ、今後も日中の学生交流の継続・深化について期待の言葉を述べました。

国際高等教育院では、海外から学生が来学する機会を活用し、今後も多文化共修セミナーを開催する予定です。

文化や言語の異なる学習者同士が、協働学習により交流し互いの価値観を認め合う取り組みに、未来を担う学生たちの積極的な参加を今後も期待しています。

(国際高等教育院)

[目次に戻る](#)

京都大学研究資源アーカイブが「増田友也建築設計関係資料, 1930-1984 (主年代 1950-1981)」を公開

本学での教育や研究のプロセスで収集または作成された資料群をアーカイブズとして永続的に学内外で利用可能にする取り組みである、京都大学研究資源アーカイブが、「増田友也建築



設計関係資料, 1930-1984 (主年代1950-1981)」を公開しました。

公開されたのは、京都大学名誉教授で建築家の増田友也(1914-1981)が、主に1950年代から1970年代にかけて作成または収集した資料群です。スケッチ、図面、写真等からなる建築設計の記録には、建築が完成に至るまでの設計および施工のプロセスが刻まれています。長年にわたり数多の建築を手掛けた本学や徳島県鳴門市等の記憶もここからたどることができます。

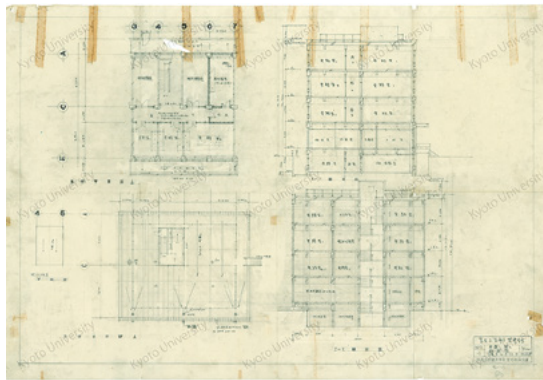
[所蔵部局] 大学院工学研究科

[資料年代] 1930～1984年(主年代1950～1981年)

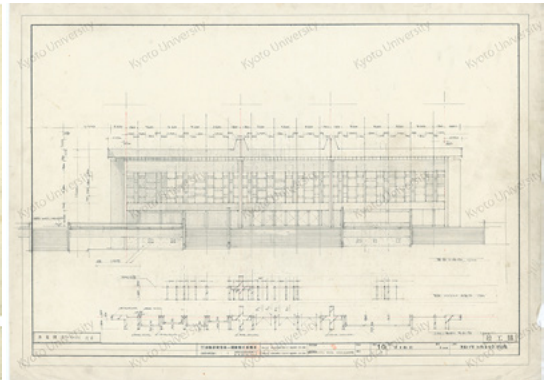
[数量] 設計図面約15,000点(原図205箱、青焼き冊子328冊)、写真約7,000点(アルバム38冊、紙焼き15箱)、会社記録約80点(事務文書等9箱)

[出所・資料作成] 増田友也(ますだ・ともや、1914-1981)

[目録作成] 2024年



断面図(京都大学工学部校舎・6号館)
資料情報: 京都大学 VI 号館_平面図2 断面図
_1/100_4_34年10月10日, Ar MIXED 2017/2/
S6-02/001/005, “増田友也建築設計関係資料,
1930-1984 (主年代1950-1981).”



立面図(京都大学総合体育館)
資料情報: 京都大学 70 周年記念体育館_東立面図
_1:100_10_決定図【71・6・22】岡本_棚橋, 増田
友也(設計担当)_竣工図, Ar MIXED 2017/2/S3-
01/003/010, “増田友也建築設計関係資料,
1930-1984 (主年代1950-1981).”



施工写真(京都大学総合体育館)
資料情報: [京都大学総合体育館](部分), Ar MIXED
2017/2/S5-02/164, “増田友也建築設計関係資料,
1930-1984 (主年代1950-1981).”



施工写真(智積院会館)
資料情報: [智積院会館](部分), Ar MIXED
2017/2/S5-02/087, “増田友也建築設計関係資料,
1930-1984 (主年代1950-1981).”

※以上の画像は全て、資料所蔵: 大学院工学研究科、データ提供: 京都大学研究資源アーカイブ

(総合博物館)

[目次に戻る ↩](#)

はからずも波乱万丈

荒木 隆司



今年の3月で経済学部を卒業して44年経つことになります。僕は決して何かをやり遂げた立派な人間ではないので、人生の指針になるようなお話はできませんが、折角の機会をいただいたので、少しばかりお付き合いください。

1980年代この国がバブル崩壊に向けて謎に元気だった時代、僕は銀行員でパリやジュネーブで7年間為替ディーラーやファンドマネジャーをしていました。バブルの終焉と共に帰国しましたが、数か月後には退職し、当時はまだまだ珍しかった下げ相場でも収益を上げられるヘッジファンドの設立・運用を経て、90年代半ばには友人たちと経営戦略コンサルティング会社を立ち上げます。バブル崩壊後一向に冴えないこの国の経済を立て直すには大企業が本気で構造改革をするか新しいベンチャーが牽引するしかないと思われ、旗幟鮮明にして、その両方を支援すると大見えを切って頑張っていました。初めての起業でもあり、人生で最も睡眠不足だった頃です。

10年後、今度は一転エンターテインメント業界に入り経営を担うことになりました。何もかも知らないことだらけでしたが、子供の頃から興味のある世界でしたので、多くの新しい仲間を支えられながら頑張りました。苦しかったけれど楽しかった、楽しかったけれど苦しかった、そんな時期でした。そして4年ほどは順調でしたが、僕の担当分野の海外とデジタルが同時に特別損失を計上することとなり、任期途中でエイバックスの代表取締役を辞任しました。コンサルタントでは経験することのない会社経営を当事者として行うことの責任を身をもって学びました。

ところが、その翌年にまたご縁をいただき懲りずに別の企業の社長をすることとなります。ドワンゴではニコニコ動画事業が順調に成長し、KADOKAWAと経営統合をし、今や日本最大の生徒数を誇るネットの高校のN高を設立するなど経営者としての経験を積んでいきました。しかしながら、就任7年でやはり経営不振の責任を取って任期途中で辞任しました。

いまこうして振り返ってもなかなかの波乱万丈な職業人生でした。最初の辞任の時には確かにショックも受け憔悴しましたが、二度目は既に覚悟の上で経営を引き受けていましたので、それなりに大変ではありましたが慌てることもなく退くことができたと思っています。

現在は、様々な経験を活かしながら、エンターテインメントや地方創生に関わる企業の社外取締役や顧問を務めつつ、次世代リーダーのコーチングやメンタリングにも携わっています。こうして今も現役で企業の変革や新規事業に関われるのは、過去の成功体験よりは失敗からの学びのおかげだと思います。本当にどうにもならないことも勿論ありますが、覚悟さえ決めてしまえば乗り切れるものです。果敢に挑戦した代償としての失敗も満更捨てたものでもない、いや寧ろそれがあるからこそ人にアドバイスができるのだと思えるようになりました。

(あらかし たかし、株式会社インテラセット 代表取締役、昭和56年経済学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

随想

夢の途中

名誉教授 垣塚 彰



病気の人を治したいと考えて医学部に進学したが、勉強しているうちに、当時の医学では治せない病気（難病）が沢山あることを知った。医学部卒業を前にして、そのような難病治療を目指してみたいという夢を抱くようになった。来るべき時に備えて、今は分子生物学を勉強しようと考え、中西重忠 教授の研究室に大学院生として加えていただいた。当時は、ネットも携帯もなく、毎日実験漬けの日々を過ごし、分子生物学を完全にマスターした気になっていた。その後、San DiegoのSalk 生物学研究所のRonald Evans 教授（Ron）の研究室で博士研究員として採用され、渡米した。当初、文化の違いから戸惑うことが多く、苦しい日々が続いていたが、主要な白血病の一つである急性前骨髄球性白血病の原因遺伝子を同定することに成功し、論文をCellに発表することができた。Ronの研究室では、世界で初めての考え・概念を提示することの意義・重要性と研究を楽しむことを学べた。これらがその後の研究人生の大きな指標となった。

しばらくして、中西先生より、「アメリカで学んだことを京大で教えて欲しい」との電話があり、医学部薬理学教室の成宮 周 教授に講師として採用していただいた。薬理学実習で仲良くなった3人の学部生（斎藤通紀君、竹林浩秀君、相澤恵さん）が、放課後に研究室に来るようになり、新たな研究がスタートした。3人の学生は異なるテーマの研究を開始したが、3つとも上手くいって、JBC、Nature、Cancer Research、Nature Geneticsに論文を発表した。その中で、遺伝性神経変性疾患 Machado-Joseph 病（MJD）の原因遺伝子の同定に成功したことが、夢としていた難病治療に向けての第一歩になった。その後の解析で、MJDは原因遺伝子から作られるグルタミンの繋がった異常蛋白質^{たんぱく}が凝集して発症していることを見だし、「ポリグルタミン病」という新たな疾患概念と異常蛋白質の凝集は遺伝に関わらず多くの神経変性疾患の原因となっているという疾患概念を世にだすことができた。これらの業績が認められ助教授に昇任し、38歳の時に、中西先生、成宮先生の恩師である早石修先生が所長を務める大阪バイオサイエンス研究所（OBI）の研究部長に呼んでいただいた。その2年後、生命科学研究所が立ち上がった時には、連携講座の教授（客員教授）として加えていただき、さらに2年後には、基幹講座の教授として呼び戻していただいた。

生命科学研究所では、ポリグルタミン病を手がかりに研究を進め、ATPの減少を抑制することが神経変性疾患に加えて他の多くの難病の治療に繋がるとの考えに至り、多くの研究者の協力を得て、難病治療薬の候補として低分子化合物KUS121の開発に成功した。KUS121は、10を超える疾患のモデル動物で治療効果を示し、現在、網膜中心動脈閉塞症を対象とした臨床試験が日本と米国で進められている。このように、学生時代におぼろげに抱いた「難病を治したい」という夢が、多くの素晴らしい研究者との出会いによって叶いそうになっている。ただ、研究費を獲得することには苦労した。特に、研究が進展して独創的になっていくほど、常識という壁が立ちちはだかり、研究費の獲得が難しくなっていくと思う。その時、京都大学がもう少し裕福で、世間の常識では弾かれるような独創性の高い研究をサポートする体制があったらいい

随想

のにと痛切に思った。京都大学は人材の宝庫であることは周知である。後は、収益を上げる体制を整備し、他では考えもしないような独創的（非常識）な研究を支援して、世界に冠たる圧倒的な研究大学に発展してほしいと望んでいる。

（かきづか あきら、令和6年退職、元生命科学研究科教授、
専門はライフサイエンス、病態医化学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

聖アントニウスの誘惑

呉 孟晋



縁あって、しばらく前から「修道院」生活を送っている。といっても実際に修道士になったわけではなく、中世のスペインのキリスト教僧院を思わせる、いわゆる「スパニッシュ・ロマネスク様式」の趣のある建物のなかに研究室が割り当てられただけのことなのだが、美術史を勉強にする者にとっては感慨深いものがある。

イタリア・フィレンツェのサン・マルコ修道院の壁面に描かれた、初期ルネサンス期のフラ・アンジェリコの名作《受胎告知》を挙げるまでもなく、修道院と絵画は深いつながりがある。絵画は院内を装飾するだけでなく、信仰に身を投じた修道士が祈りを捧げたり、ときに怠惰と驕奢を戒めたりする心の拠りどころとなった。禁欲的な生活を送る場としての「修道院」の原型をつくったとされるのは250年ごろエジプトに生まれた聖アントニウスである。彼もまた修行を重ねるなかで、さまざまな誘惑や妄想にかられ、そしてそれらに打ち克った。妖艶な怪物や醜悪な悪魔が数多く登場する蠱惑的なイメージは「聖アントニウスの誘惑」という主題になって、ヒエロニムス・ボスからサルバドール・ダリまで多くの巨匠たちの創作意欲をかきたてた。「文学の修道士」とよばれた19世紀フランスのギュスターヴ・フローベールの小説『聖アントワヌの誘惑』（1874年）もイタリアのジェノヴァでみたピーテル・ブルーゲルの作品をから着想したという。

人文科学研究所分館は、昭和5年（1930）に当時の外務省から助成をうけた東方文化学院京都研究所の新所屋として完成した。尖塔と高層の書庫の後ろに口の字型の平屋があり、回廊に沿って奥ゆきのある間取りの居室がずらりと並んでいる。口の字のなかは芝生が植わる中庭になっており、ベンチも置かれている。本学の考古学講座教授で研究所評議員をつとめていた濱田耕作の発案で、本学建築科の武田五一に学んでいた当時20代後半の東畑謙三が設計した。中国を中心とする学問である「東洋学」に取り組む研究所に似つかわしくない、遊びどころあふれる設計と意匠になったのは、中国風の外観となった兄弟格の東京研究所（現東京大学東洋文化研究所）とはあえてちがうところを狙ったからだそう。

さて、この建物で東洋学を「信仰」する筆者の怠惰を戒めるのは、一階ロビーに掲げられた須田国太郎による油彩の大作《発掘》（1930年）である。本学で美学美術史を学んだ洋画家が本所の研究の柱のひとつである考古調査の一場面をなかば抽象化して描いたもので、作者のことばによれば中央アジアの曠野を連想させるような発掘現場にいる人と馬を表わしたという（「画で立つまで」、1950年）。晦渋な暗褐色を基調とした画面は、明るさのなかにも陰りをたたえたスペインを遊歴して須田が体得した表現であり、期せずしてスペイン風の「僧院」にふさわしい作品になっている。

人文科学研究所分館は、漢籍の蔵書量では国内有数の規模を誇る図書館でもある。研究目的であれば学内、学外を問わず閲覧できるので、この「僧院」を訪れたついでに須田の大作も鑑賞してみたいだろうか。

（くれもとゆき、人文科学研究所准教授、専門は中国絵画史）

[目次に戻る](#)

栄誉

田中 功 工学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、材料科学研究における優れた業績により、田中 功 工学研究科教授が、11月3日(日)に紫綬褒章を受章されました。

田中教授は、永年にわたって、材料科学の教育および研究に努め、材料科学研究において新たな理論と技術革新を推進しました。「量子材料設計」という先駆的な研究領域を開拓し、先進セラミックスの量子材料設計、第一原理計算に基づいた材料開発に関する研究、構造材料の元素戦略研究など、材料科学分野における革新的な進展を先導し、国際的にも高く評価されています。このほか、ナノインフォマティクスをはじめとする英文教科書の出版にも携わり、わが国のリーダーシップを世界に示す重要な一歩となったほか、世界各国の研究者や学生にとって貴重な学習資源を与え、新たな研究の発展に大きく寄与しています。



(大学院工学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

西田眞也 情報学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、知覚心理学研究における優れた業績により、西田眞也 情報学研究科教授が、11月3日(日)に紫綬褒章を受章されました。

西田教授は、永年にわたって、知覚心理学の研究に努め、心理学と情報学の分野融合に貢献しました。人間がものを見る仕組みのさまざまな側面を、主に心理物理学的手法を用いて解明したほか、時間的知覚の研究では、脳内で別々に処理される情報の間の時間関係が、さまざまな物理的な時間ずれの要因の影響を受けずに、正しく判断されるための脳の仕組みを明らかにしました。また、質感の研究ではコンピューターグラフィックスを使った光沢感の心理物理研究を世界に先駆けて行い、輝度ヒストグラムに含まれる低次の画像特徴が光沢知覚に影響することを示しました。視覚の仕組みを心理学的・神経科学的に明らかにするだけでなく、人間の特性を利用した革新的な映像提示技術の開発に貢献してきました。



(大学院情報学研究科)

[目次に戻る ↗](#)

話題

学部生の研究チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の国際大会「iGEM2024」で金賞を受賞

京都大学の学部生による研究チーム「iGEM Kyoto」が、2024年10月23日(水)から26日(土)までフランスのパリで開催された合成生物学の学生大会 iGEM 2024 Grand jamboree に出場し、昨年に引き続き2年連続の金賞を受賞しました。また、同時に Best Agriculture Project と Best Hardware の各最終候補に選出され、惜しくも受賞は逃しましたが、チームとして過去最高成績に迫る高い評価を受けました。

iGEM (International Genetically Engineered Machine competition) は、2003年から米国を中心に開催されてきた合成生物学の学生研究コンテストであり、21年目になる今大会では、50を超える国と地域から400以上のチームがパリのポルト・ド・ベルサイユ国際展示場に集まり、成果を競いました。リモートで参加した2,000名を含め、合計4,500名が参加する大きな大会になっています。

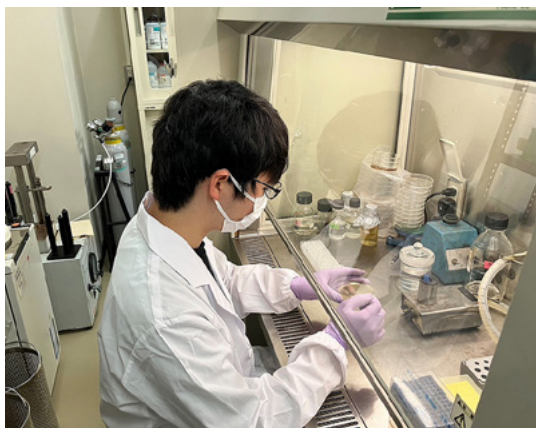
iGEM Kyoto は「ShowgNs」と題したプロジェクトに取り組み、農業における過剰施肥の問題を解決するため、窒素化合物を効率的に定量する無細胞バイオセンサーの開発に取り組みました。実験室での研究に加え、利害関係者への取材や市場調査、ハードウェアやソフトウェアの開発、中高生への教育活動など、幅広い活動が高く評価されました。



ミーティングの様子



大会側から届いた遺伝子部品のセットを開封する様子



実験室での様子



表彰式後の集合写真

【関連リンク】

iGEM Grand Jamboree

<https://jamboree.igem.org/2024/home>

話題

iGEM Kyoto

<https://igemkyotoofficial.github.io/>

(医生物学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

令和6年度総長杯ボウリング大会を開催

2024年11月21日(木)と22日(金)の両日、いずれも午後6時30分から、ROUND1京都河原町店にて、令和6年度総長杯ボウリング大会を開催しました。新型コロナウイルス感染症のため一時中断していた同大会ですが、再開後2回目となる今年は昨年を上回る54チームの参加申込があり、初めて2日間での開催となりました。会場ではストライクやスペアなどの好プレーのたびに大きな歓声があがり、和気あいあいとした雰囲気の中、参加者の笑顔弾ける楽しい大会となりました。

大会結果は次のとおりです。

<団体>

優勝：フィールド科学教育研究センター「チームFS」(1,170ピン)

準優勝：医学部附属病院「チームお祭り騒ぎ」(1,167ピン)

<個人>

優勝(男性)：川俣 昭 (フィールド科学教育研究センター・359ピン)

優勝(女性)：数藤 茜 (医学部附属病院・357ピン)



優勝チーム：優勝したフィールド科学教育研究センター「チームFS」と、個人優勝者(男性の部)の川俣さん(写真右端)



準優勝チーム：準優勝した医学部附属病院「チームお祭り騒ぎ」



個人優勝者(女性の部)：数藤さん(写真左端)

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)

訃報

このたび、前川和也 名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績などを紹介します。

前川 和也 名誉教授

前川和也先生は令和6年9月12日逝去されました。享年83。

先生は昭和39年京都大学文学部史学科を卒業、昭和41年同大学院文学研究科修士課程を修了し、博士課程在学中の昭和43年10月に同大学人文科学研究科西洋部助手に採用されました。昭和54年7月に同研究所講師、昭和56年4月同研究所助教授、平成元年4月に同研究所教授に昇任、その後平成17年3月に定年退職され、同年4月に京都大学名誉教授の称号を受けられました。退職後、平成18年から平成23年までは国土館大学21世紀アジア学部の教授を務められ、その後もご逝去の時まで同大学イラク古代文化研究所共同研究員として活動されました。

先生は紀元前3千年紀にさかのぼる古代シュメール語楔形粘土板文書の研究で世界的に知られ、シュメール都市国家時代のラガシュ（前24世紀中頃）やシュメール統一王朝期（ウル第三王朝時代、前21世紀）に刻まれた多くの粘土板行政・経済文書の解読、出版、分析を通じて、人類最古の文明社会のあり方を解明する数多くの重要な研究を発表されました。神殿都市、神殿組織の連合体として議論されていたシュメール都市社会組織の理解を一変させた研究、シュメール社会における賦役・貢納システム、土地改革事業、公共耕地における小作料設定の原理、当時の農業生産の極めて高い効率性等、農耕とそれに関わる社会・行政システムの詳細なあり方を実証的に明らかにした研究がその例として挙げられます。

先生の研究論文のほとんどが英語で発表され高い評価を得ていることから知られるように、その研究活動は真に国際的で、ケンブリッジ大学において「シュメール農業研究グループ」が組織される際にも中心的役割を果たされました。

一方で人文科学研究科においては多くの共同研究を組織し、比較史や社会史、あるいは古代国家形成のあり方について重要な成果をものして、世に問うてこられました。その間、先生は常に、現代社会における人文科学的知のあり方を考え続け、将来にわたってhumanityを護持していくことがいかに重要であるかを、共同研究を共にした若い研究者や、30年以上指導を続けられた文学研究科の学生に語りかけてこられました。

(人文科学研究科)

[目次に戻る](#)